

## 日々の生活の活力 ～努力の大切さ～



毎回大盛り上がりの尻尾取り



キーボードを弾いてもらい盛り上がりました



大きい子は英語を使って会話します

皆さん、こんにちは。日本では梅雨に入り、雨が続けていることと思います。カンボジアでも雨季に入り、毎日のスクールで洗濯物が乾かない日が続いています。

さて、今回のドリム通信では、毎年6月に行われるワタミグループ社員ツアーの参加者様との交流と、6月から新しく仲間になったカンボジア人職員についてお伝えいたします。

### ワタミグループ社員ツアーの来園

毎年6月に、ワタミ社員の方々がカンボジアについて、そしてSAJの活動について知るため、2泊3日の弾丸ツアーが敢行されます。今年も総勢25名の方がツアーに参加され、ツアー2日目となる6月12日に孤児院へ来園されました。

当日午後3時過ぎに来園された皆さんを子どもたち全員でお迎えし、センターホールにて挨拶をした後、社員の皆さんに園内の案内をしました。子どもたちの普段の生活の様子について、問題や困っていることなどについて、いくつもの質問が飛び交い、社員の方々の意欲の高さに驚かされました。園内を案内した後は、子どもたちの補習授業の様子や農作業の様子なども見ていただき、一緒に作業をしたり、普段の子どもたちの生活を体験していただきました。自由交流の時間には、子どもたち対社員の皆さんで尻尾取りゲームを行い、非常に盛り上がりました。

また社員の皆さんから子どもたちにおにぎりのプレゼントが用意され、夕食時に皆で食べました。カンボジアの主食はお米ですが、カンボジアで食べられているお米は細く長いインディカ米で、日本で食べられているジャポニカ米のような粘り気が少なく、おにぎりにするのは難しいです。そのため、おにぎりを食べたことがない子が多く、焼き海苔やふりかけなども初めて見る子ばかりです。子どもたちは最初、ふりかけのかかった小さなおにぎりを手にとり不思議そうに見つめていましたが、ひとつ食べると「おいしい！」と口々に言い合い、2つ3つと食べ進み、用意していただいたおにぎりを全て食べ切りました。各テーブルにて自分で作れるように用意していたおにぎ



おにぎりの作り方を教わりました



毎回来てくださる方との会話が楽しみです



ティー・サヴァンナロアさん、22歳



ヴァン・ヴァンさん、23歳

りの材料も全て使い切り、おにぎりのプレゼントは大ヒットでした。

食後は社員の皆さんと自由に交流し、最後に子どもたちから伝統舞踊の披露をしました。お返しに社員の皆さんからの踊りの披露をしてもらいますが、これも毎回のことで、子どもたちはとても楽しみにしています。今回は子どもたちも一緒に踊れるよう、簡単な振り付けを教えていただき、皆で一緒になって踊りました。

短い時間の中でも、同じ時間を共有し、一緒に作業をしたり、遊んだり、たくさん触れ合うことが出来ました。社員の中には毎年来てくださる方もいて、子どもたちの成長を楽しみにしてくださっています。子どもたちには、たくさんの方に見守られていることを感じ、これからの日々の生活の糧にして欲しいと思います。

## 新職員の紹介

6月には2人の職員の入れ替えがあり、配属の異動も行いました。今回新たに園職員に仲間入りした2人の調理担当職員の紹介をします。

1人目はティー・サヴァンナロア、22歳です。昨年高校を卒業し縫製工場で働いていましたが身体を壊し、解雇された後は実家で家事手伝いをしていたそうです。子どもが通う小学校の先生の息子さんで、素直で真面目な子だ、との周りの評判もあり、雇うことにしました。実際に一緒に働いてみると、先輩職員の言うことを良く聞き、周りを良く見て気がついた時には掃除をしたり片付けをしたり、と気の利く人です。また男性なので力仕事も率先して引き受けてくれ、一番力のいる米炊きの仕事を任されています。

2人目はヴァン・ヴァン、23歳です。彼は家庭の事情で中学卒業とともに働きに出ました。地元を離れて縫製工場やレストランなどで職務経験を積んでいましたが、母親の病気をきっかけに実家の近くで働いて母親を助けたい、と地元に戻ってきたそうです。家庭の事情により、小中学ともに学校に行けないことが多かったそうで、現在は小学3年生ほどの学力しかありませんが、真面目で働き者、母親思いで、どんな仕事でも引き受ける、と周りの評判も良かったので、今回雇うことに決めました。実際に働いてみて、寡黙で真面目な勤務態度と、レストランでの調理の経験もあり、すぐに仕事に馴染めました。

今回調理担当の職員2名を男性職員にしたことで、今まで女性ながらに力仕事も頑張ってくれていた現職員の負担を減らすことが出来、とても助かっています。彼らの働きを通して、男女の違いはなく何の仕事であっても一所懸命努力することの大切さを、子どもたちには学んでもらいたいと思います。